

# 新渡戸稲造のインドネシア観

はじめに

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）は、教育者として文化、道徳、社会、政治、など様々な分野を通じて広く国際舞台でも活躍し、江戸・明治・大正・昭和という時代変動期に生涯を送った。青年期から自身が抱いた「願わくば、われ、太平洋の橋とならん」という熱い志にのっとり、多大なる功績を残した。また、名著 *Bushido: The Soul of Japan* で、彼は単なる「日本」という国を紹介するだけではなく、自国の文化および思想は東西に渡り世界に共通する点があると強調し、さらには台湾総督府技師として台湾の農業の発展、国際連盟の事務次長として国際平和のためにも力を尽くした。

現在に至るまで、新渡戸稲造における研究は様々な視点で行われてきたが、国際関係における分野では、国際連盟事務次官としての役割、自国と関連の深い中国・朝鮮・台湾問題に焦点をあてたものが多い。しかし南洋、特にイン

## アントニウス・プジョ

ドネシアに関わる問題はまだ殆ど行われたことがない。新渡戸は、その生涯の中で二度ほどインドネシア（蘭領東印度）を訪ねている。一度目は、台湾総督府の技師となり、台湾の糖業を改良する調査のため、一九〇二年にジャワ島を訪れている。二度目は、東京帝国大学の植民地政策講座の担当教授になった時、南洋の欧米による植民地事情を調査するため、一九一六年にセレベス島、ジャワ島等を訪れている。

二度にわたりインドネシアを訪ねた新渡戸は、その文化、文明、思想、インドネシア人の生活をどのように観ているのか。また自身の研究調査は（この場合糖業と植民地政策）、どのような意義を持っていたのか。さらに、彼にとって当時オランダ領下であったインドネシアは、どのような意義があったのか、これらの疑問に対して彼が残した資料を通じて検討する試みである。

## (一) インドネシアへの認識

現在の国名「インドネシア Indonesia」が正式に誕生したのは、戦後の一九四五年八月一七日の独立宣言による。一九世紀以降、「南方」及び「南洋」と呼ばれている半分以上の面積を占めるインドネシアには、一六世紀末であらゆる王国が存在して平和に暮らしていた。しかし、一八二〇世紀前半までオランダに支配され、人々の生活と自由は奪われた。この地域は、後に「蘭領東印度 *Nederland East Indies*」と名付けられ、三五〇年という長きに渡り遠く離れたオランダの支配を受けることとなったのである。

日本史上に於いてほとんど目立たないこの地域が、いつから「南洋」及び「南方」として認識されたのだろうか。矢野暢によれば、日本人における南方の認識は江戸時代の「南方経略論」に起源を持つといった見方があるという。たとえば、佐藤信淵『防海策』の中で「南洋」、「閩南」という表現が登場している<sup>1)</sup>。しかし、本格的に産業の発展などのため注目されてきたのは明治期になってからのことである。本庄栄治郎は、南洋経験に関わる代表的な書として六つ上げている<sup>2)</sup>。すなわち、志賀重昂『南洋時事』(一八八七)、菅沼貞風『新日本図南之夢』(一八八八年に書かれ一九四〇年に出版)、田口卯吉『南洋経略論』(雑誌論文、一八九〇)、樽井藤吉『大東合邦論』(一八九三)、

副島八十六『南方経営論』(講演筆記、出版年不明)、竹越與三郎『南国記』(一九一〇)である。その中の、竹越與三郎は、日本は北進及び大陸進出には無理があると指摘し、「日本人民の注目すべきは太平洋」であると述べ、日本の将来は南にあると主張している。明治期の産業革命により、日本企業がより多くの資源を求めるようになったことで、西洋諸国に遅れをとった日本人の南洋ないし「海」への関心が高まり、それを見直すべきだというのである<sup>3)</sup>。

新渡戸稲造の場合、「南洋」と関わり始めたのは一九〇一年、後藤新平(一八五七―一九二九)から招待を受けたことがきっかけとなった。後藤新平は、新渡戸と同じ岩手県出身で、一八九八―一九〇六年に台湾総督府民政長官として、台湾の経済的独立を推し進めるため、植民地政策と農業に詳しい人物を探していた。そこで彼は菊池武夫(一八七五―一九五五)に相談すると、新渡戸稲造の名が挙がったという<sup>4)</sup>。新渡戸は、同年の五月一日に民政部殖産課長として着任し、台湾糖業を改良する為に、同年二月八日からフィリピン、インドネシア、オーストラリア、ハワイへ視察するように命じられた。そこでインドネシア(蘭領東印度)の地を初めて踏むこととなったのである。この時、インドネシアにおける主な訪問先はジャワ島であった。ジャワ島で彼はバタビア(現在ジャカルタ)、ピ

テンゾルク（現在ボゴール）、マオス、スラバヤなどで糖業の調査を行った。彼は、翌年の一九〇二年五月に台湾に戻り、しばらくしてから後藤新平と共に視察のため渡米した。その後、新渡戸は本土の日本に戻り、一九〇五年から東京第一高等学校の校長を初め、京都帝国大学、東京帝国大学で植民地政策の講座の担当を務めた。台湾での任務期間は一九〇一―一九〇三年で長くなかったが、台湾の糖業発展に多大なる功績を残した。特にジャワの製糖がことに新渡戸に強い印象を与えたようであるという。

新渡戸は東京帝国大学で、植民地政策という講座を担当する際、南洋の植民地事情の変容などを確認するため、一九一六年五―六月に再度調査を命じられた。今回の南洋訪問は、フィリピン、マレーシア、インドネシア、シンガポールなどの東南アジア中心であった。二度目のインドネシア訪問は、初回到訪れたジャワ島の他、ボルネオ島（現在カリマンタン島）、セレベス島（現在スラウエシ島）、スマトラ島と広範囲なものとなった。以下、新渡戸の行ったインドネシア視察内容について述べることにする。

#### ①一度目のインドネシア（一九〇二年）

新渡戸の一度目のインドネシア行記は「南洋植民地雑感」、『台湾協会会報』四五・四六号、一九〇二年六―七月）と

いう記事に収録されている。ここで新渡戸が注目したのは、ジャワ島の気候、ジャワ人及びオランダ人の生活、農業事情、オランダの植民地政策などである。たとえば、ジャワ島の様子について新渡戸は、熱帯地だが割合に気候は暑くなく、また水利が良いと記している。また、ジャワ島の中心になっているバタビアは、東洋唯一のヨーロッパの「支店」のようなものであり、シンガポールに比べても決して「遜色はない」と評価している。またジャワ人の衣類「サロン」という広い布の両端を縫い合わせたものの便利さについて、「サロン程世界に便利なるものはない」と評価している。このサロンは、ジャワ人だけではなく、ジャワ島にいるオランダ人も自宅にいるときは普段着としてよく着用しているのを見て新渡戸は驚いている。またジャワ島では、農業は盛んに行われているが、工業は全くない現状を残念に感じたという。

新渡戸は、一九一〇年に書いた論文記事「台湾に於ける糖業奨励の成績と将来」に於いて、台湾の糖業がジャワとハワイに及ばない一つの理由としては台湾の水利状態であるという。台湾の土地性は乾地であり、蔗園にはあまり良くない。水利が改善できれば生産量も上げることができるだろうと新渡戸が意見を述べている。ジャワ島に滞在している間、糖業調査を行うため、農業研究所及び砂糖生産を

中心になっている町であるバタビア、ビテンゾルク、マオス、スラカルタ、ジョクジャカルタ、スラバヤ、パスルアンなど汽車で西ジャワから東ジャワまで訪れている。その期間は、一九〇二年一月三日～二月二日のおよそ一ヶ月間で、二月三日に汽船ジャコブ号に乗船し、シンガポールへ向かった。

## ②二度目のインドネシア（一九一六年）

二度目のインドネシア訪問も、一九一六年五月一〇日～六月三日の約一か月間であつたが、訪問先は前回より増えた。セレベス島（メナド、ミナハサ、マカッサル）、ジャワ島（スラバヤ、パスルアン、サマラン、スラカルタ、ジョクジャカルタ、バンドン、ビテンゾルク、バタビア）、スマトラ島と、かなり広く調査にあたっている。今回の南洋視察団体に参加したのは六一名で、新高丸に乗り、四月二六日午後六時に台湾の打狗港を出港した。また現地で視察する際、その六一名を専門分野により六班に分け（各班は十名）、新渡戸は教育と農業の班に配属された。このときの視察に関する報告及び記事の多くは、『実業之日本』、『台湾時報』、『東洋時報』に収録されている。ここで新渡戸が持ったインドネシアの印象をまとめてみたい。

### ア、熱帯地域

インドネシアは、赤道直下であるため一年中暑い。しかし、だからと言って涼しいところがないわけではない。たとえばジャワ島バタビア近郊にはテンゾルクという高原があり、スラバヤ近郊にもパスルアン及びトーサリという避暑地がある。ジャワ島にいるオランダ人たちは、週末余暇を過ごすため、また病氣療養のためそれらの避暑地に別荘を所有していた。<sup>(8)</sup>

### イ、面積の広い地域

日本人が抱いていた、南洋はただの岩のような小さな島という誤解を修正している。たとえば、ニューギニア（パプア）の面積は日本の三倍、ボルネオは日本の二倍、スマトラ島は日本より広い島であり、ジャワ島は日本の半分、セレベスは日本の半分などと説明している。誤解の引き金は、一九一五年、日本海軍がマーシャル群島を占領したとき、その島々は岩のような島で南洋は広い島がないと言われたことから誤解を招いている。新渡戸は、南洋、主にインドネシアの面積について「なかなか此面積は馬鹿にした面積ではない」と付け加え述べている。<sup>(9)</sup>

### ウ、人口が少ない

新渡戸が不思議に思ったことは、広大な面積を誇るイ

インドネシアであるが、人口が少ないことであつた。人口が少ないと国は発展しないと述べ、その原因は衛生問題にありと指摘し、それを解決しなければならぬと述べている<sup>(10)</sup>。また国の発展に関わる労働者不足の問題について、新渡戸は一つの提案を挙げている。それは「資本」である。「資本さへ、供給するを得ば労力は支那印度より輸入する事容易なり」と彼が「資本」で「働きの者」として評判の良い中国人と印度人の雇という方法を提案している。

## エ、民族の多様性

インドネシア人は、その大半がマレ人種であるが、その他にも様々な民族が混在し、またその言語も異なる。その中のミナハサという北部セレベスにある地域の民族は、肌の色、言語などが日本人によく似ていた。この民族について新渡戸は、「我日本の田舎生活に比して文化程度遙かに高きものたるを認む<sup>(11)</sup>」と評価している。そして新渡戸は、このような多種多様な民族が、一つの国となれば「大騒ぎ」が起きるかもしれないとインドネシアの将来的な問題を推測している。

## オ、古い文明のあるところ

インドネシアにも古い文明が存在している。これについて新渡戸は次の様に述べている。

## カ、品格のある民族

吾々はジャワといふと、植民地で、野蛮な国だと思ふが、そんなものではない。古い文明のあるところである。その美術といひ、建築といひ、日本に見ることのできないやうなものがある。ブルブドアの建築などは、奈良ほど綺麗ではないけれども、印象の偉大なることは到底奈良の及ぶところではない。昔は大いに文明のあつた国である<sup>(12)</sup>。

インドネシアには、昔様々な王国が存在していた。そのうち、現在にも存続しているジャワのジョクジャカルタとスラカルタは有名である。これらの王朝について、新渡戸は次のように述べている。

皇室も矢張り一通り王道の教育を受けた人と思はれる。皇太子なども洵に品が好くて、遠方からの来客は、吾々のやうなものにでもなかなか愛想よくされる。物の言ひ方といひ、態度といひ、受ける印象は矢張り高位の偉人と納得出来るほど、王者たるの教育が一通り備はつてゐる<sup>(13)</sup>。

## キ、日本人の祖先の出身地

ある学説の中には、日本人の祖先は南から来たのである。「詰まり日本人と云ふものは大体に於いて馬來人でせう<sup>(14)</sup>」ということで、日本人は「里帰り」という形で、



南洋（インドネシアなど）を見るべきである。このような学説は当時流行となり、竹越與三郎『南国記』の中にも書かれている。<sup>16)</sup>

このように、新渡戸が抱いたインドネシアの認識は大きく二つの柱がある。第一に、内側に立った見方、すなわちインドネシアという地理的な意味とそこに住む人々の生活と文化である。言い換えれば、インドネシアという地域は、面積と豊富な資源だけではなく、世界共通的にあるように人々はその文化、習慣、価値観、文明などを持つ。しかし、特に文明に於いては地域ごとにレベルが異なる。第二に、外側に立った見方、すなわちインドネシアという地域は日本にとつてどのような意義を持つているのかということである。新渡戸は、インドネシアという地域は日本の将来ならか関わりのある国になると感じ、日本の経済的な発展は、ひいてはインドネシアの発展も繋がると述べている。本節では、「新渡戸の『インドネシア』への認識について論じたが、これからオランダの植民地としての『インドネシア』に対してどのようにみているかを検討してみたい。

（二）オランダ植民地としてのインドネシア  
インドネシアという地域には一六世紀まであらゆる王国

が存在し、外国の国々と交流し、貿易を行っていた。ところが、一五世紀末から一六世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは海洋技術の進歩と共に、またガリレオによる地球が丸いというコペルニクスの発見の支持をきっかけとして、ポルトガルをはじめ、スペイン、イギリス、オランダなどの国々が海洋探検を行い、アメリカ、アフリカ、インドネシアを含む東アジアなどの国々へ初めて到着した<sup>17)</sup>。

インドネシアにはじめて上陸したヨーロッパの国は、ポルトガルであった。ポルトガルの船は、香辛料を求め、一五二二年マルク諸島のテルナテ王国に到着した。その後およそ一〇〇年、ポルトガルはインドネシア東部とヨーロッパ間の交易路を支配したのである。しかし時間がたつにつれ、他のヨーロッパの国々も同様に香料原産地を求め、東南アジアまで迫り着いた。特に、オランダの商人たちは一五九六年、ジャワ島のバンテン王国にやってきて多くの香料を国へ持ち帰った。オランダの商人たちの争いを防止するため、オランダ政府は連合東印度会社 (Vereenigde Oost Indische Compagnie、略称 VOC) という貿易会社を設立した。VOCは、オランダ政府より特権を得てその権力を拡大したが、現地住民たちの不満が募り、一五九六年に商業団体として廃止された。その後、一八〇七年までオランダ政府が権力を握り支配していくこととなった。

しかし、一八世紀末から一九世紀初頭まで、ヨーロッパに於いてフランスのナポレオンによる戦争が拡大し、オランダ政府も大きな被害を受けた。戦争後の一八三〇年、国の復興のため植民地のインドネシアに強制栽培制度 (Culturstelsel) が実施された。その作物は、特に蔗、コーヒー、お茶、タバコなどでヨーロッパでは価格の高い商品だった。この制度のおかげで、オランダの国家財政収入は徐々に上昇し、経済も急速に復興した。国家の収入のうち、植民地ジャワからの割合は、一八三〇年〜五〇年度が一九%、一八五一年〜六〇年度には三一%に上昇した<sup>18)</sup>。

イギリス領印度の役人であった JWB Money は、病氣保養の目的でジャワを訪れ、このような強制栽培制度を見て大いに驚いた。彼は著書の *Java or How to Manage A Colony* (一八六一) で、印度においてもこのような制度を応用すべきだと論じている。実は、一九〇二年に糖業の調査のためにジャワを訪れた新渡戸は、ジャワの豊富な土地性、また「強制栽培政策」の結果でオランダ政府が多大なる利益を得たことに對し、「誠に羨ましく思ふ<sup>19)</sup>」と述べていた。しかし、この政策によって原住民の身体を幾分か束縛することになり、歴史上に於いてはこの「半奴隸政策」は既に「遺物」になったと主張している。また、新渡戸は、強制労働政策には、原住民の労働能力や健康状態や生

活環境などの様々な問題が存在しているので、日本の植民地台湾に於いて強制栽培政策をとるべきかどうかを深く研究し、慎重に議論すべきだと強調した<sup>(20)</sup>。

一九一六年、二度目のインドネシア訪問の際、新渡戸はこの地域の状況が少し変わったことを感じる。自分の目で見ただけを以下の様に記している。

和蘭政府の植民政策就中、土民に対する政策なるものは殆ど中古的にして、本国の商人の懐を肥やす為には人道を無視し、土人教育杯を更に顧みる所無く、人種的偏見を増長する面白からざる状態の存在せるを知りたり。(中略) 然るに今回我輩は爪哇に上陸したる其日より教育の制度に付いて少しく心を注ぎ視察したるに、我輩の印象は十五年前の其れにして近く十年以来の爪哇政府の遣口は一変して、進歩的主義を収て蘭人が土人に臨みつゝありし事を発見したり<sup>(21)</sup>。

新渡戸が見た事実は正にそのとおりであった。彼が最初に来た時、強制栽培制度が実施されており、植民地の住民生活は非常に苦しいという状況を自分の目で見たのだ。その制度及び政策は「中古的」であり、住民たちの人権をほとんど無視し、あたかも奴隷のような扱いであったと新渡戸

は述べている。しかし、その十年後、二度目に再び訪れたときは状況が変わっていた。今まで植民地の人たちから多くの利益を得たオランダ政府は「恩返」として「倫理政策」という住民生活の改善政策を実施していたのである。

インドネシア及びジャワに於けるオランダの強制栽培制度によって、原住民には貧困、病氣など様々な問題が発生し、原住民の生活がより苦しくなった。このような植民地の事実は、オランダの政治家たちの耳に入らなかったことから一九世紀末まで改良的な政策がなされなかったという。ところが、メディアの発達により、植民地事情が報道され、知られるようになる。その結果、一九〇一年より倫理政策(Ethica Politiek)という植民地の原住民たちの教育、医療改善を主とした生活改善政策が実施された。

このように、新渡戸は植民地インドネシアにおけるオランダ政府の政策、この場合強制栽培制度に対し、賛同していないことが分かった。彼は、植民地を管理する際、人道的な政策が重要であると主張したのである。その後、オランダ政府は「倫理政策」で、植民地の人々の生活を改良し、新渡戸は、これを「進歩主義」と称したが、同じアジア民族としてのインドネシア人は西洋の支配から独立してほしいと彼が望んでいる。

又爪哇の土人間に於いても動もすれば、亜細亜人必ずしも西洋人に劣らず、何時迄も我々は蘭人の顧下に屈従する要あらん。我々とても奮起一番せば立派なる独立国を建設し得るや論無し<sup>(22)</sup>。

上記の引用文のように、新渡戸はオランダ政府によるジャワ人の屈従に反対し、彼等の「覚醒」を期待し、オランダ政府の支配から独立することが彼の同じアジア民族への「同情」ともいえるであろう。

### (三) 植民地政策の比較としての台湾

新渡戸がインドネシアと関わるきっかけは、台湾総督民政部殖産課長に着任したとき、台湾の糖業を改良するためジャワ島を調査する命令を受けた時からであることは既に上述した。また台湾という地域は、一七〇一八世紀までスペインを初め、オランダ、フランスと中国の領土だったことは周知の通りである。一八九四〜一八九五年に起きた日清戦争の日本の勝利の結果で、また下関条約（一八九五）により清朝より日本に割譲することになった。これについて新渡戸は、「あまりにも主君がよく変わったので台湾人はあまり愛国心を持っていないが、彼らは非常に賢く、働き者、法遵守的な民族である」と評価している<sup>(23)</sup>。

台湾は日本にとって経済的な価値は殆どないが、日本領土の防衛のために重要な位置にあった。また、清朝（中国）欽差大臣の李鴻章（一八二三〜一九〇二）は、台湾には様々な難問があるため、喜んで日本に譲渡すると、実は中国にとって台湾は慢性障害のようなものであるという<sup>(24)</sup>。その理由は三つある。すなわち、山賊問題、ペスト及びマラリア流行問題、首狩りの問題である。日本政府は、台湾の発展を進める際、児玉源太郎総督（一八五二〜一九〇六）と後藤新平民政長官らを中心に、まずこれらの問題に着手した。人道的な解決法を探り、彼らに樹脂の木栽培の仕事を与えその生活改善をはかった。

台湾における日本の植民地政策は、基本的に三期に分かれている<sup>(25)</sup>。第一期は、一八九五〜一九一八年、第二期は、一九一八〜一九三七年、第三期は、一九三七〜一九四五年である。第一期、台湾総督府は原住民に対して厳格な憲兵のコントロールを導入し、土地・人口の調査、民俗学、農業等に関する研究を行いデータの収集に力を尽くした。第二期は、台湾の経済発展を進めると同時に、日本の文化および教育制度を台湾に導入し、同化を固めることを中心とした。第三期は、第二次世界大戦の準備として重工業と外国貿易を重点にし、台湾人を日本人として帰化させる時期であった。日本領土下の台湾開発が、識字、協同組合など

現在の台湾の基礎となり、植民地であつたもののその発展に繋がったことは明確であらう。

全体的に日本の植民地としての台湾の開発は、多岐にわたつた。すなわち、近代的鉄道、農業研究及び開発、公衆衛生、金融、教育、識字、協同組合などである。たとえば、一九三七年まで、交通の分野では、鉄道二八五七マイル、道路二五〇〇マイルを建設し、農業の分野では水利とダム整備を行い、米、砂糖黍などの生産量が年ごとに増加した。その中でも、台湾の発展で最も大きな役割を果たした砂糖は、十年の間に七倍の生産量増加を成し遂げ、一九三九年までに台湾の砂糖生産量は世界第七位になつたといふ<sup>(26)</sup>。

前述したように、新渡戸の台湾での任務は、他でもなく台湾の経済発展に関わる産業開発である。札幌農学校出身の新渡戸は、農業分野に関しても多く知識を有していた。台湾に適切な産業を模索する中、台湾の産業で最も成功率高い分野は糖業であると結論付けた。農業としての米、茶、小麦、藍なども生産可能であるが、「先づ世界的商品砂糖が一番良い<sup>(27)</sup>」と確信したのである。台湾の糖業の話を児玉総督に提案し、一任され新渡戸は糖業の一〇年間の生産量を五倍にしたという。新渡戸は砂糖だけではなく、米、茶なども研究し、品質改良を実施してその生産量を増やしたが、糖業分野の飛躍的な生産量増加は台湾時代の新渡戸

にとつて最大の成果となつた。

このように台湾の自立を目指す総督府は、産業の発達と同時に住民のために交通、教育、医療など生活の様々なインフラ整備も積極的に実施した。しかし、五一六〇年間もの長きに渡り、オランダの支配を受け強制栽培政策が実施されたインドネシア、主にジャワでは、そのようなインフラ整備などがオランダ政府によつて実施されることはなかった。農作物などを安価で購入し、諸外国へ高値で売り、オランダ自国の利益重視政策であつたのだ。新渡戸もこのような状況を目の当たりにしている。後に、オランダの政治家や新聞記者らの批判で、強制栽培政策は廃止され、その代わりとして倫理政策を実施したが、台湾のような結果をもたらずまでには至らなかつた。

以上のようにインドネシアにおけるオランダの植民政策と違つて、台湾における日本の植民政策は、単なる日本の防衛目的だけではなく人道的なる植民地という意味を持つていた。新渡戸は、台湾を「一攫千金の場所と思はず、国民を挙げて世界に雄飛する所の階段<sup>(28)</sup>」だと述べ、次の人生の階段に登るために貴重な体験であると考えていたのである。

#### (四) インドネシアの将来と日本の使命

新渡戸は、大正五年（一九一六年）七月八月に、「南洋

の将来」という『台湾時報』に於ける連続記事の中で、南洋及びインドネシアの大きな可能性について以下のようにまとめている。

南洋は熱帯地域であり、工業なり、農業なり、その熱エネルギーを利用すべきだという。その自然資源である「太陽の力」を利用しない手はない。また、ボルネオ、ニューギニア、スマトラ等に黄金、ダイヤモンド、鉄山、石油などの宝の山が存在していることから、今後地理的な探検が必要であるという。鉱業すなわち鉱山業、採掘業及び製作業は、今後必ず南洋（インドネシア）において発展する兆しがあるという。

労働者不足に関しては、まず衛生面を整備し人口増加を図り、また多種多様な民族が存在しているが、日本と同じアジア民族として自覚すれば、近い将来、植民諸国（イギリス、オランダ、アメリカなど）、つまり西洋の国々に対抗する力を持ち独立できるであろうと述べている。

新渡戸は日本の領土拡大について、「我大和民族の発展及び国威の伸張は濫りに隣国の領土を覬覦し野望を逞しうするに存するにあらず」と述べ、日本は隣国の領土に手を出さないと主張している。また新渡戸は、領土権よりはむしろ商業権を確立したいと述べ、インドネシアを日本の産業市場として将来性のある地域と認識していた。

しかし、インドネシアを日本の市場として作るためには、いくつかの注意があると指摘している。すなわち、第一に、南洋における日本の市場に物資を供給する点については吾人は着実にかつ懇切に其本分を尽くすこと、第二に、南洋の天地は日本の企業家を持ちつつあり、農事工業其他百般の事業についておそらく欧人より日本人の方がその地方の風土人情等に一層よく適応すべき、したがってこの事業に関わっている日本人はその任務を最も着実に正直に実行すること、第三に、南洋には日本の高等なる労力の供給を待望し始めている。この三点の要件をもって、日本は南洋の発展と共にいきたいと強調している。<sup>33</sup>

ここから、新渡戸はインドネシアとオランダにおける日本の立場は中立であったことがわかる。また、日本人がインドネシアで商業権を持つことができるならば、誠意を持って事業を実行しなければならないと述べ、日本人の誠実なる点を主張している。日本の発展はインドネシアの開発につながっていると述べ、日本の東洋におけるリーダーシップを強調し、その使命を明確にした。

#### おわりに

インドネシアは日本の歴史に於いて、中国・台湾・朝鮮という東アジア諸国と比較したとき、目立たない存在であ

るが、近代日本史に於いては欠かせない存在である。特に「南洋」というテーマに於いて、志賀重昂、竹越與三郎、新渡戸稲造などの近代日本の知識人たちは、それぞれの目的で当時「蘭領東印度」と呼ばれていたインドネシアを訪ねている。特に新渡戸稲造は、生涯にわたり二度、その土を踏んだ。一度目は、一九〇二年に台湾の糖業改良調査のためにジャワ島へ、二度目は、一九一六年に南洋における植民地事情調査のためにセレベス島、ジャワ島等を訪れている。

日本の面積より六・七倍程広い熱帯地域で、ジャワ島の農業地以外は殆ど未開拓であり、しかしながら豊富な資源を所有している。また、そこに住む住民は多様な民族であり、多種多様な文化を持っている。そのようなインドネシアは、新渡戸にとって魅力的であったようである。しかし、この豊かな国がオランダの「中古的」な植民地政策により苦しむ様子を見た新渡戸は、同じアジア民族として同情の念にかられ、近い将来インドネシア人も自覚し、西洋諸国からの支配から独立することを望んだ。インドネシアにおけるオランダの植民地政策とは異なり、新渡戸は台湾を事例にして、日本が植民地を管理する目的は、単なる防衛と経済的理由にとどまることなく、現地の台湾人のために人道的政策を行わなければならないと主張している。

インドネシアに於いて日本は領土権より、商業権を確立したいと述べ、新渡戸はオランダとインドネシアに対し、日本の中立的な立場を強調している。そして、日本人がインドネシアに於いて事業を行う際、誠実なる事業を実行すると述べるところに、教育者としての新渡戸が表れている。日本人の道徳観念を強く守らなければならないと述べた点は、新渡戸らしさによるところであろう。また、新渡戸は、日本の発展は南洋及びインドネシアの開発に繋がると述べ、日本の東洋におけるリーダーシップを強調している。これは、新渡戸による日本の「使命」及び「役割」の強調と考えられる。先行研究で、ほとんど触れていない新渡戸の中国及び朝鮮観ないし植民地政策思想については次の課題にしたい。

## 註

- (1) 矢野暢『「南進」の系譜』中公新書、一九七五年、四八頁
- (2) 本庄栄治郎『先覚者の南方経営』日本放送出版協会、一九四二年
- (3) 竹越與三郎『南国記』一九一〇年、一二頁
- (4) 矢野暢『「南進」の系譜』前掲、五四頁
- (5) 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造辞典』教文館、二〇一三年、

六〇頁

- (6) 楠木榮「新渡戸稲造：糖業発展のテクノクラート」『日本人台湾を拓く』まどか出版、二〇一三年、六五頁
- (7) 新渡戸稲造「台湾に於ける糖業奨励の成績と将来」『国家学雑誌』明治四十三年（一九一〇）、四月第二四卷第四号『新渡戸稲造全集』第四卷、一九六九年、一三二頁
- (8) 新渡戸稲造「南洋の将来」、『台湾時報』八二号、一九一六年七月『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、一九二一、一九四頁
- (9) 新渡戸稲造「南洋の将来」、前掲、一九〇頁
- (10) 新渡戸稲造「南洋の将来」、前掲、一九八頁
- (11) 新渡戸稲造「南洋の経済的価値」『国家学会雑誌』大正五年（一九一六年）一〇月、二月、大正六年（一九一七年）七月、第三十卷第十号、第十二号、第三十一卷第七号『新渡戸稲造全集』第四卷、一九六九年、二七二頁
- (12) 新渡戸稲造「南洋巡航記」『台湾時報』八二、八三号、一九一六年七月、八月、前掲、一三〇、一三二頁
- (13) 新渡戸稲造「内観外望」『新渡戸稲造全集』第六卷、教文館、一九八四年、二九二頁
- (14) 新渡戸稲造「内観外望」、前掲、二九二頁
- (15) 新渡戸稲造「熱帯植民に就て」『台湾時報』一九一一年六月二三号『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、一三二頁
- (16) たとえば、『南国記』の「第九章經國の大業、不朽の盛事」に於いて竹越與三郎は、「併しながら大體に於て南洋より来たりし馬來の血液が最も多いと云ふことは疑はれぬ所である。」と述べ、『古事記』におけるマナシカタマの船という文字を解釈し、恐らく南洋地方の安南及びジャワ・スマトラから来たのではないかと推測している。一九一〇年、三三三、三五四頁
- (17) イワン パドリカ『世界の教科書シリーズ二〇・インドネシアの歴史』明石書店、二〇〇八年、一二二頁
- (18) Cees Fasseur, "Nederland en Nederlands-Indië, 1795-1914 in Aigemene Geschiedenis der Nederlande, 15 vols. Harlem: Fibula van Dishoeck, 1983, 11, p.362-63 from Frances Gouda, "Dutch Culture Overseas: Colonial Practice in The Netherlands Indies 1900-1942, Amsterdam University Press, 1995 p.47
- (19) 新渡戸稲造「資本と植民」『東洋時報』一九一〇年一〇月、一四五号『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、拓殖大学、二〇〇一年、一二七頁
- (20) 新渡戸稲造「植民政策講義及論文集」『新渡戸稲造全集』第四卷、教文館、一九八四年、一五二、一五三頁
- (21) 新渡戸稲造「南洋巡航記」『台湾時報』八二、八三号、一九一六年七月、八月、『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、二四六頁
- (22) 新渡戸稲造「南洋巡航記」、前掲、一四三頁
- (23) 新渡戸稲造 Japanese Colonization (一九一九年)『新渡戸稲造全集』第二十三卷、教文館、一九八七年、一一五頁
- (24) 新渡戸稲造 Japanese Colonization (一九一九年)、前掲、一一三頁

- (25) Taiwan Year Book 2005, Government Information Office, 2005 p. 46
- (26) Taiwan Year Book 2005, 前掲 p.47
- (27) 新渡戸稲造「台湾の学生のために」(一九一五)『東洋時報』二〇二号『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、拓殖大学、二〇〇一年、一五九頁
- (28) 新渡戸稲造「熱帯植民地について」『台湾時報』二三号、一九一一年六月『新渡戸稲造——国際開発とその教育の先駆者』に収録、拓殖大学、二〇〇一年、一五一頁
- (29) 新渡戸稲造「南洋巡航記」、前掲、二四八頁
- (30) 新渡戸稲造「南洋巡航記」、前掲、二四九頁